

言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 井上 義夫
論文題目 『評伝 D. H. ロレンス』全3巻
論文審査委員 中井 亜佐子准教授、三浦 玲一准教授、海老根 宏教授

I 本論文の構成

D. H. ロレンス (1885年-1930年) は20世紀イギリスにおける最も重要な文学者、思想家の一人である。本論文はこのロレンスの思想と生涯の全体像を多数の未刊行資料、公文書等の調査を通じて叙述、批評するものである。全3巻からなる本論文の構成は以下の通り。

第一巻 薄明のロレンス

1. アーサー・ジョン・ロレンス
2. リディア・ピアドゥソル
3. 少年の陽だまり
4. ロレンス家の富と貧困
5. ハイスクール時代
6. ハグス農場、ヘイウッド商会
7. 死蔭より
8. 新しい夏
9. 教員見習生
10. 創作への道
11. ジェシー・チェインバーズ
12. 懐疑の時代 — ノッティンガム・ユニヴァーシティ・カレッジ
13. ルイ・バロウズ
14. 大学卒業前後
15. 『リティシア』と初期習作
16. クロイドン、デイヴィドソン・ロード・スクール
17. 文壇デビュー — フォード・マドックス・ヘファー
18. 性の残骸
19. ヘレン・コーク
20. リディア逝く
21. 死の面影
22. 『白い孔雀』『或る坑夫の金曜の夜』『ジグムント・サガ』
23. エドワード・ガーネット
24. 病いの救済

25. 或る邂逅 — フリーダ・ウィークリー
26. フォン・リヒトホーフエン家の娘たち — マックス・ウェーバーとオットー・グロス
27. ヨーロッパ大陸の光

第二巻 新しき天と地

1. イタリア、ガルダ湖畔
2. 『ポール・モレル』と『恋しい息子たち』
3. 天才の実り
4. 知人の渦 — マーシュ、シンシア、マンスフィールド、マリ
5. ひとりだけの「虹」 — イタリア、フィアスケリーノ
6. 夏薫るイギリス
7. 第一次世界大戦勃発
8. 『プロシア士官』『トマス・ハーディ論』
9. 政治の季節 — オットリーヌ・モレル、バートランド・ラッセル
10. E. M. フォースター
11. 夢魔の学府、ケンブリッジ—メイナード・ケインズ
12. 「使徒会」と『白痴』の世界
13. イギリスの沼 — 「ブルームズベリー・グループ」
14. 群盲生く — 「ルシタニア号」撃沈
15. 別離の初め
16. 新しき天と地—ツェッペリン飛行船
17. 『虹』
18. 人の災禍
19. 「王冠」『イタリアの薄明』
20. 古代の血、ケルトの世界
21. 鳥の棲む日々
22. コーンウォール退去
23. 大戦終結

第三巻 地霊の旅

1. 滞る日々
2. 『恋する女』とオカルティズム
3. フィレンツェ、ローマ、ピチニスコ
4. カプリの窓
5. 『ヨーロッパ史の諸運動』『精神分析と無意識』『国民教育論』
6. シチリアの朝 — タオルミーナ
7. 冥府の風邪 — ファシズムの芽

8. 欧州の彼方へ

9. 『エアロンの杖』『無意識の幻想』『大尉の人形』
10. セイロン、オーストラリア
11. タオスのメイベル
12. メキシコ、チャパラ湖
13. 『カンガルー』『ケツアルコアトル』
14. 荒涼たる間奏
15. 東の間の帰郷 — ドロシー・ブレット
16. アメリカ大陸再訪
17. オアハカの大患
18. 『羽毛ある蛇』
19. 和やかな陽光 — イタリア、スポトルノ
20. ミレンダ荘から
21. エトルリアの故地
22. 『チャタレー夫人の恋人』
23. 遁走する未来 — オールディントンとハックスリ
24. 受難の季節
25. 「死んだ男」『三色堇』
26. 死のいそぎ
27. エピローグ

II 本論文の概要

第一巻ではまず、ロレンスの父アーサー・ジョン・ロレンスと母リディア・ピアドゥスルの家系の説明がなされる。出生、結婚、死亡等に関する公的文書、国勢調査票、当時の住宅地図、郷土史等の調査の結果、父アーサーが採炭請負人（バディ）としてかなりの年収を得ていたこと、母リディアの生まれたマンチェスター・アンコウツの聖アンドリュース通りがスラム地区であったこと、父ジョージ・ピアドゥスルが労働者階級であったこと、結婚直前のリディアの職業が「レース糸抜人」であったこと等が明らかにされている。これらは全て「中流階級の母と労働者の父」といういわゆる「ロレンス神話」を完全に覆す事実である。

さらに第一巻では、ロレンスの幼年期から妻フリーダと駆け落ちしヨーロッパ大陸に渡る1912年までが叙述される。幼年期のロレンスは野心的な母の影響で中流階級の子弟のごとく育てられる。ハイスクール卒業後はいったんヘイウッド協会に就職するが、次兄ウィリアムが急死し、ロレンス自身も長く病床にふせる。回復後、ハグス農場を経営するチェインバーズ一家と親しくなり、後に婚約者となるジェシー・チェインバーズと知り合う。この辺りの伝記的叙述では、ロレンスが必ずしも母親に精神的に支配されてはいなかったことが強調されている。その後ロレンスはノッティンガム・ユニヴァーシティ・カレッジに進学し、卒業後教師となるが、その後本

格的な執筆活動に入る。第一巻後半では『リティシア』に代表されるロレンスの初期の草稿が綿密に検討されている。

第二巻では1912年以降第一次世界大戦終結時までが描かれる。まず1912年9月に書き上げられた初期の傑作『恋しい息子たち』の最終草稿と草稿『ポール・モレル』の綿密な比較が行われる。1914年6月フリーダと結婚後、第一次大戦勃発によりイギリスに滞在を余儀なくされたロレンスは、ミドルトン・マリ、キャサリン・マンスフィールド、ケンブリッジのブルームズベリー・グループらと相識になるが、彼ら彼女らとロレンスとの間の緊張関係や葛藤の様子が詳細に叙述される。1919年3月ロレンスはケンブリッジを訪れる。通説では、昼過ぎにパジャマ姿で出てきたJ. M. ケインズの姿を見て彼がホモセクシャルであることを見抜いて激しい嫌悪感を抱き、上流階級に幻滅を感じたということになっているが、本論文ではこの説はパートランド・ラッセルによって故意に喧伝されたと指摘される。また、1915年に9月8日にロレンスがロンドンで爆撃するツェッペリン飛行船を目撃した事実に注目し、これを「新しい天と地」が生まれなくてはならないという黙示録的体験と位置付ける。第二巻後半ではコーンウォール滞在中のロレンス夫妻とマリ、マンスフィールド間の複雑な人間関係・男女関係が緻密に描かれ、フリーダとロレンスの関係がこの頃破綻していたという見解が示される他、『トマス・ハーディ論』、『イタリアの薄明』、『虹』の分析を通じて、大戦末期のロレンスの体験に基づいた思想がどのように形作られていったのかを詳細に検討している。

第三巻ではまず、『恋する女』の執筆過程が辿られる。妻フリーダとの関係の事実上の破綻とといった伝記的コンテクストを下敷きに、複数のタイプ草稿が比較検討される。次に、『ヨーロッパ史の諸運動』、『精神分析と無意識』、『国民教育論』等、ロレンスのエッセイ群が分析され、ロレンスの歴史観ならびに政治思想がファシズムに接近する危険を秘めてはいるにせよ、文学者としてのロレンスが想像力でもって混迷する世界の行方を見極めようと努力する様が描かれる。また、セイロン、アメリカ合州国（タオス）、メキシコなど世界を転々と移動したこの時期のロレンスの軌跡が、徹底的な現地調査を通じて明らかにされる。最後に、有名な『チャタレー夫人の恋人』が三種類の草稿の比較、さまざまなモデルの検討を通じて分析される。また、「愛らしい貴婦人」、『定本詩集』の分析を通じて、最晩年のロレンスが自己の人生を「中産階級の母と労働者の父」の産物として自ら神話化していった様子が描かれる。

III 本論文の成果と問題点

本論文は、日本のロレンス研究の頂点を極めるばかりか、同時期にケンブリッジ大学出版局から出版されたロレンス伝（ジョン・ウォースン、マーク・キンケッド＝ウィークス、デイヴィッド・エリス著、全三巻；1991, 1996, 1998）に匹敵する国際レベルの伝記・研究書である。本論文の具体的成果に関しては、まずロレンスの生涯における事実関係の徹底的な調査が挙げられる。公文書等の一次資料に直にあたり、またロレンスの赴くところはイギリスはもちろんのことドイツ、イタリア、メキシコ、アメリカ合州国、オーストラリアにまで足を運び、可能な限り客観的な歴史的事実をつきとめている。調査の綿密さという点では、日本に拠点を置いて研究活動

を行うという地理的ハンディがあるにもかかわらず、ケンブリッジ版ロレンス伝に勝るとも劣らない。しかしこの著作の利点は単に資料の徹底的収集および事実関係の正確さととどまるものではない。ロレンスの書いた作品に対しては、その草稿の段階から丁寧な検討が試みられている点など、批評書としての価値も高い。また伝記的記述においても随所に井上氏独自の解釈を呈示している。

本論文がその綿密な調査に基づきロレンスの生涯にまつわる「神話」を覆した一例としては、まず第一巻において、ロレンスの家系にまつわる積年の誤解を解消したという点が挙げられる。ロレンスの家系についてはロレンス自身晩年に「中産階級の母と労働者の父」と述べているが、これを1980年に最初に覆したのは郷土史家のロイ・スペンサーである。井上氏はスペンサーの著作に拠りつつ、1848年にまで遡る国勢調査票、当時の地図、郷土史等をノッティンガム、マンチェスター、シアネスに赴いて調査し、ロレンスの父母の一族が住んでいた通り、家の大きさ、隣人たちの職業、父の職業である炭鉱労働者の年収等を独自に調査することによって、ロレンスの母親も実は労働者階級の出身であったこと、また父母の結婚においてはむしろ母親の方に経済的メリットが大きかったことを証明している。また、このような事実を明らかにすることにより、両親の階級差を前提とする『恋しい息子たち』のエディプス・コンプレックスの主題（ジェシー・チェインバースに由来する解釈）は、伝記的事実に基づくものではないことが強調される。

第二巻における主要な成果は、階級問題と並んでロレンス神話の重要な一部分をなす1915年3月7日のケンブリッジ訪問にまつわる事実関係が検証されている点である。「昼近くなってパジャマ姿で出てきたケインズの姿を見て、ロレンスはたちまち彼のホモセクシャリティを見抜き、激しい嫌悪感を抱いた」という通説があるが、井上氏は当時のロレンスの書簡等の資料を調査しその思想的背景（ドストエフスキーの『白痴』に感銘を受け、世界に浸透する巨大な悪の原理を認識していた）等の要因を検討した上で、「ロレンスのホモフォビア」という解釈を否定し、またこの一件に対する誤解が、当時ケンブリッジを放逐されようとしていたバートランド・ラッセルによって煽られたものであったことも指摘している。

その他、1915年9月8日にロレンスがロンドンを爆撃するツェッペリン飛行船を目撃した事実注目したこと、妻フリーダとの関係を独自の観点から捉えなおしたこと、第三巻において『チャタレー夫人の恋人』のさまざまなモデルを明らかにし、またその背景となるロレンスの思想的変化を辿ることで、この作品の意義を新たに捉えなおしたことなどが、ロレンス研究に関する本論文の重要な成果として挙げられる。

さらに、本論文の成果は、単にロレンス研究の枠内にとどまらず、ヨーロッパ知識人による「近代超克の試み」をその中心的主題と捉え、ロレンスを取り巻く人々の人間像を的確かつ簡潔に浮かび上がらせている点にもある。特にデイヴィッド・ガーネット、ミドルトン・マリ、キャサリン・マンスフィールド、バートランド・ラッセル、E. M. フォスターなど当時の文学界、思想界の重要人物が見事に描かれており、1910年から1920年代のイギリス文化史、思想史の優れたスケッチとなっている。

本論文にはこうした多数の成果が見出される反面、若干の疑問点や問題点も残されている。まず第一に、ロレンスの作品の価値と「人間ロレンス」との関係に関して、理論的考察がほとんど

どなされていないという点である。このことは、「残した作品そのものよりその思想や人生の方がおもしろい」ロレンスという作家の個性にもよるところがあるが、評伝というジャンルを文学批評においてどのように位置づけるかという問題は、今後十分検討されるべき課題である。

第二の問題点は、徹底的な事実関係の調査にもかかわらず、しばしば（ときにはやや強引な）推察や判断に依拠する記述が見受けられる点である。この点は本論文の危うさでもあり「読み物」としての魅力でもあるが、学術論文としては「事実」と「判断」の区別をより明確にするか、両者の境界線の危うさについてメタレヴェルの考察がなされることが望ましい。

第三に、本論文にはロレンスの東洋思想（仏教哲学等）に言及される箇所があるが、これらにはロレンス本人の思想というよりは、井上氏自身の言語文化的背景（いわゆる「日本的な」文学観）に拠る部分も見受けられる。この点で本論文は英語で出版されているロレンス研究とは一線を画するわけであるが、日本語による外国文学、思想研究の意義については、今後より積極的な検討が試みられるべきである。

ただしこれらの問題点は、本論文の意義を低めるものではなく、今後の研究の出発点となるものである。井上氏が長年に及ぶ資料探索とロレンスの著作の批評・分析により日本語によるロレンス研究の記念碑的大著を完成させたことの意義は非常に大きいと考える。

以上、審査委員一同は、本論文が該当分野の研究に寄与するところが大きいと認め、一橋大学博士(学術)の学位を授与することが適当であると判断する。